

# 京丹後市に学ぶ持続可能な社会のあり方

宇野 絵里奈、石田 千尋、茨山 幸子、川崎 萌菜  
工島 梨加、熊岡 志保、鳶津 美里、清野 楓  
中西 一貴、福岡 千郁、山本 晴香、山本 真理

## はじめに

私たちのゼミでは、国内外の地域開発における諸問題について学んでいる。これらを考えるにあたり、最も重要なことの1つは、“持続可能である”ことであると考えている。

今回訪問した京都府北部では、少子高齢化にともなう人口減少、過疎化、地域文化の保存など様々な問題を抱えている。そのようななかで、地域の人々の暮らしを保ちつつ、観光客や若者など外部者との交流をも重視し、地域住民が主体的に地域創生に関わり持続可能なまちづくりを目指してきた。今回の研究の目的はこのような地域の人々がどのような取り組みをされているのかを学ぶことである。

## 1. 丹後ちりめん歴史館

合宿1日目には、丹後ちりめんの歴史・伝統文化の継承を学ぶために丹後ちりめん歴史館を訪れた。

### 1-1. 丹後ちりめんの歴史

丹後地方の文化は早くから開け、1200年前には絹織物がすでに織られていた。丹後ちりめんを築いたのは、今から280年ほど前（享保初年・1716年）である。三河内村の山本佐兵衛や峯山藩絹屋佐平治など丹後ちりめんの始祖といわれる人たちが、京都西陣の機屋で織物技法を研究し、丹後に技法を持ち帰り、この地で製織を始め、現在の丹後ちりめんの礎を築いた。そして丹後はちりめん産業の中心地となり長い年月を経て今日に至る。

しかし、近年ではちりめんなどの地域の繊維産業は衰退の一途を辿っている。若い人財が都市へ進出することにより、今後ちりめん産業を担う人材が不足しているためである。そこで、ちりめん産業に現

在携わる人々は、伝統の存続のために様々な取り組みを始めている。ちりめん歴史館もその取り組みのなかのひとつである。

訪問した歴史館の建物は1935年に建てられた工場で、その屋根部分は日本の産業遺産としても希少な木造のノコギリ型三角屋根で出来ており、北窓からの自然光を取り入れることで織機の縦糸3700本もの動きが肉眼でも検査できる工夫がなされている。今回私たちは丹後ちりめん歴史館を訪問し、手作りの織物体験を通して歴史ある絹織物を身近に感じることができた。また、機織り機も現在まで大切に保存されている。

### 1-2. 現在の取り組みとこれから

約300年の歴史がある丹後ちりめんを次世代に伝えていくために、私たちが訪れた丹後ちりめん歴史館は大切な役割を果たしている。この施設は、工場部分と販売店部分とに分かれている。工場部分には機械化された機織りが設置され、今も稼働している。さらに当時の工場の写真や資料も展示されており、ちりめん産業が盛んだった頃を想像することが出来る。また販売店部分では、手に入りにくくなった希少なシルクの端切れやシルク製品を格安で販売している。また、シルク製品の手織り体験もすることもでき、実際にちりめん産業を、耳や目で体験できる施設となっている。このような施設があることで、丹後ちりめんの歴史、伝統を伝えていくことが出来ている。また、織物という日本の伝統産業を体験できる貴重な施設なので、外国人観光客の興味を惹きつけることも可能ではないだろうか。

このような長い歴史を持つ丹後ちりめんは、2017年4月28日に『300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊』として「日本遺産」に認定された。

「日本遺産」とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを語るうえで、欠かせない魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって、総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することで、地域の活性化を図ることを目的に2015年度に制度化されたものである。丹後ちりめん歴史館、そして「日本遺産」に認定されたことをきっかけに、国内外から丹後地域に人が集まり、今後さらに賑やかになっていくはずだ。地域の文化・伝統は唯一無二の魅力である。それらを大切に守り、伝承していこうとする地域住民の思いが、持続可能な地域づくりに欠かせないものなのだ、この訪問を通して学ぶことが出来た。

## 2. 地域の方々のお話

わたしたちは今回京丹後に住む三人の方に京丹後での暮らしについてお話を伺った。一人目は元地方公務員で現在農業を営む橋本さん。二人目は養老地域会議の代表の橋田さん。三人目は元地方公務員、現在はご主人と民泊を営む嶋崎さん。

### 2-1. 若者が都市への流出

京丹後には仕事が多いわけではなく、若者が自分たちのしたい仕事が見つからず、都会へ出ていくのは仕方がない。高校を卒業して95%の人が大学や就職のために都市に出ていき、そのうちの1割しか戻ってこない。地元の人々はいつか帰ってくるという望みを持ち続けるしかない。もし、その望みまでも捨ててしまったら、消滅集落になってしまう。しかし、これから地域にかなりの人口が増加することは期待されていない。このあたりは食が自慢で、民宿で食す米はおいしいと評判である。しかし、農業に従事する人も減ってきている。そのため、都市ではできない農業や漁業での暮らしを体験したりして、またここに来たいと思ってくれる人が増えることが地域の人々の願いである。また、空き家や廃校となった学校や、空いている公共施設活用を力を入れ、チャンスを作っていこうとしている。今までの文化を継承していくのはもちろん、新しい文化をとり入れ、もっと魅了するものを増やそうと新たな一歩を踏み出している。

### 2-2. 外部の人との交流

外部の人たちが来てくれることによって、新しい考え方やライフスタイルなどが生まれる。京丹後に移住を希望する人にはここでの生活に溶け込めるかなどを確認するため、毎回面接を行う。そして、移住者たちに少子高齢化を食い止めるためにすべきことなど様々な意見を聞き、新たな解決策を見つけようとしている。外部の人たちが移住してきて良かったこと、良くなかったことはそれぞれある。良かったことは消防団員が増えたことである。懸念としては地域の人たちが移住者との間に壁を作っていることである。移住者を増やすため、まずは農業や漁業を体験できる民泊を増やしたりして、京丹後での暮らしに興味を持ってもらうことが大切である。実際に民宿を営む嶋崎さんはもっと民宿を営む人が増えてほしいとおっしゃっていた。また、少子高齢化が進んでいる京丹後では外部からの移住者を増やすため、今様々な取り組みを行っている。若い人をターゲットとした婚活イベントもその一例である。すぐに大きな成果を得ることは大変難しいが、これらの活動を今後も繰り返し続けることで外部との交流を続け、10年後20年後も持続可能な社会を作ることに努めている。

## 3. 伊根の舟屋

合宿2日目には伊根の舟屋を訪問し、舟屋の歴史、舟屋のある暮らしについてのお話を伺った。(図1)

### 3-1. 舟屋について

伊根町は漁業を中心に栄えてきた町であり、海と共に人々は生活を送ってきた。伊根町には活用できる土地が大変狭く、舟を置くスペースがなかったために舟屋ができたとされている。また、伊根町の地形は舟屋に適した土地構造となっている。伊根湾は南を向いて広がっており、また湾の入り口に青島があることによって波が立ちにくい。潮の満ち引きが少なく、日本海側の干満の差が少ないことも特徴の一つである。舟屋がいつから作られたのかは明らかにされていないが、200数十年前にはあったのではないと言われていた。このように伊根町の土地構造が舟屋に適していたからこそ、舟屋が生まれ、守

り続けられてきたのである。

### 3-2. 伊根・舟屋の生活と歴史

伊根町は鰯（ぶり）が有名で、富山県氷見市、長崎県の五島列島と並ぶ鰯漁場である。宮津藩の時代には鰯を年貢として献上していた。しかし、舟屋の暮らしがあったのは、鰯ではなく捕鯨のおかげである。鯨の出荷記録は鯨永代帳に細かく残されており、江戸中期から大正初期までの間の約250年間、およそ年に1~2頭のペースでとっていたことがわかっている。鯨は収益が大きかった。鯨肉よりも鯨油としての価値が高く、鯨油で集落全体が1年は暮らしていけるほどだった。そのため、伊根では鯨が大事にされ、青島にある神社には鯨の墓がある。しかし、現在の漁業人口は減少しており、一番多いときで60~70人いた漁師が今は十数人ほどである。漁業者が減ると船がなくなり、舟屋がなくなる。船揚場がデッドスペースになり、部屋に改修されたりしてしまうことを住民は危惧していた。



図1 伊根の舟屋の様子

### 3-3. 舟屋の景観の保存と観光

交通の便が決して便利でない伊根町に訪れる観光客は伊根の舟屋に興味がある人が多く、その中の外国人観光客の6割が台湾人で、タイ、香港と続く。そこで、日本で唯一の景観であり、生活環境である伊根の舟屋を保存し続けることで、伊根町の価値を維持し、その魅力を求めて人々が訪れることから、2005年に国の「重要伝統的建造群保存地区」の認定を受けた。しかし、より多くの来訪者を求めるというよりも、舟屋で人間らしい生活を送る地元の人々の心地の良さを第一に考え、少数であっても伊根町のファンを獲得することが重要であると考え、様々な体験を通して伊根町の魅力を知ることができるような観光振興にまち全体で取り組んでいる。

## 4. 袖志の棚田

伊根町訪問の後、袖志の棚田を訪れ、棚田再生に向けた活動や問題点を伺い、見学を行った。(図2)

### 4-1. 袖志の棚田の歴史

京都府の最北端に位置し、日本海を眺めることのできる京丹後市丹後町袖志の棚田は1999年農林水産省の「日本の棚田百選」に選出されるなどかつては約600枚の棚田があり袖志の方々の生活の一部であった。しかし、人口減少と少子高齢化が進むにつれて担い手不足による耕作放棄地が増加したり、鳥獣害被害が増加したことにより今では約400枚まで減少した現在12ヘクタールのうち約2ヘクタールが休耕地となっている。このような雇い手不足による休耕地が増えることにより、さらに労働力が減っていき、袖志の将来への不安が高まり、袖志の人々の地域に対する自信が失われ、棚田への想いの希薄化が問題とされた。行政も棚田保全のための取り組みを行ってはいたが、具体的な解決策として機能しているといえるものはなかった。

### 4-2. 袖志棚田保存会の発足

このような事態を受けて、地域に残る貴重な棚田を守ろうと袖志の住民たちが2011年に「袖志棚田保存会」を結成した。この活動を開始したきっかけは棚田にやってきた学生との出会いであった。京丹後市丹後町出身である学生の研究活動の一環で袖志の棚田において休耕地が増加していることが明らかになり、また、住民の中にはその棚田を再生・保存したいと思っている方が多数いることがわかった。棚田袖志保存会の取り組みとして、都市部の学生やボランティアと協働し、定期的にイベントを開催することによって都市部の学生の手を借りて田植えや稲刈りを行っている。活動8年目となる2017年においては、休耕面積の13%の棚田を再生することに成功した。今回私たちがお話を伺った杉本さんもかつては袖志棚田保存会のイベントに参加していた都市部の学生であった。イベントに参加するうちに棚田への想いが大きくなり、地元の方々との交流により絆が生まれ、移住を決意し、今では袖志棚田保存会の一員として活動されています。このよう

なイベントを通じ、担い手不足の解消や棚田保存の活動が実を結んでいる。



図2 袖志の棚田の風景

### 4.3. 今後の課題

こうした取り組みをしてみて新たに見つかった課題もある。まず、再生地の中には現在都市部にいる人や、在住しているが高齢のため自分では手入れできずに他人に耕作を委ねた棚田もあり、実際に日々の管理をするのは現在耕作している住民や保存会になる。そのためただ再生枚数を増やすだけでは彼らの負担が大きくなってしまいます。また、棚田の再生枚数が増えると田植え・管理・収穫それぞれにより多くのボランティアの手が必要になってくる。住民も高齢となり、年に何度もボランティア向けのイベントをすることの難しさもある。

今回の棚田訪問を通じて、棚田の再生と保全のために重要なことは、都市部の学生やボランティアと体験や交流の形でイベントを行うことだとわかった。再生が進む中で新たに見つかった課題もあるが、都市部の学生やボランティアとの交流によって、地域住民も自身の地域の魅力を改めて認識し、日々の棚田管理の活力になっている。さらに、最近では近隣地域から取り組みへの見学もあり、地域同士の協力も更に取り組みを活気づけ、棚田の持続可能な再生につながっていくのだと感じた。

### おわりに

今回の合宿で一番強く感じたことは、京丹後市が様々な問題を抱えつつも、田舎ならではの多くの魅力を持っているということである。京丹後市に限らず、日本の田舎や地方では、少子高齢化や仕事がないことを原因とする人口減少・過疎化が進んでいる。さらに、住民の多くが高齢者となり、伝統産業

・地域産業や農業・漁業の担い手不足が問題となっており、地域社会の存続が危ぶまれている。それに加えて、問題を解消するに向けて課題になってくることが、地元住民の住み心地と観光客や移住者などの外部の人々の誘致との双方のバランスがとれた活動を継続することであり、これこそが持続可能なまちづくりとなっていくと感じた。

京丹後市には、都市部のような便利さや仕事はないかもしれないが、都市部にはない自然の豊さや人々の温かさ、そしてとれたての野菜や魚などの新鮮な食など田舎ならではの魅力ある暮らしがある。都市部の人々と同じような生活を送ろうとするのではなく、田舎で暮らしていくために必要な収入があり、自らが育てた作物を食べて暮らしていくといった都市部とは違う価値観で見ると多くの魅力があることに気づいた。私たちが田舎の魅力を発見した一方で、地元の方々には都市部の人々と学生と交流することで日頃当たり前だと思っていた良さに気づき、自分たちの町に誇りを持つことで、地域の暮らしの良さの継続と更なる活気が期待できるのではないかと感じた。また、都市と田舎の暮らしを単なる価値観の問題で片づけてしまうのではなく、互いに今ある魅力と新しい刺激を掛け合わせていくことで、都市と田舎それぞれの持続可能な共存につながるのではないかと感じた。そして、実際に地域の暮らしに触れる機会を得た私たちが今回の学びを発信していくことで貢献できるのではないかと感じた。

### 謝辞

この調査は、海と星の見える丘公園の清水さんを始め、快く依頼を引き受けてくださった橋本さん、橋田さん、嶋崎さんのご協力によるものです。協力していただいた皆様へ心から御礼を申し上げます。

### 参考文献

- 「日本遺産 (Japan Heritage)」の認定について／京都市ホームページ、アクセス日：2017/09/27  
<http://www.pref.kyoto.jp/bunkanso/news/nihonisan.html>  
海の京都「和の源流をめぐる旅 その二 伊根」、アクセス日：2017/10/9  
<http://www.uminokyoto.jp/genryu/ine/index.html#chapter1>